
INSANITY

咲魔@テラ駆け出しドンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INSANITY

【Nコード】

N1904Z

【作者名】

咲魔@テラ駆け出しドンだー

【あらすじ】

とある世界からふたたび帰ってきた青年の笑いあり恋愛ありはたまたシリアスありの日常！

さて、彼にはどんな運命が待っているのか！！

ゆっくりまったりとお送りする咲魔初の一次小説です！！

プロローグなんて無かった（前書き）

あい、初の一次小説です…楽しんでくださいーい（＾－＾）／

ブローグなんて無かった

秋吉夜哉は今年で五十歳になるのだが、外見は二十歳の時となんら変わってはいなかった。それは、三十年前、彼は妖怪となったからだ。

しかし、今こうして又しても現代社会に溶け込んでひっそりと、またまったりと人間の側でくらしている。

彼は、戸籍上では死人の扱いである。彼がとある世界に旅立った時、既に行方不明とされ、三十年間発見されず、死んでいるとされたのはつい最近、気まぐれで死亡の偽装をしたからだ。

そういえば、彼が現世に舞い降りたのはおとといの事である。前の世界が、とても清んだ空気が駆け巡っていたので、帰ってきた時は若干噎せた。やはり、科学技術の発達と大気汚染の関係は比例の関係にあるのだろうか。そう思わずにはいられないのである。

彼は今、ゲームセンターに居る。なんのことはない、長年の友人（だと彼は思っている。）が好んで飲んでいたビールを傾けながら、久々のゲームセンターの感覚に酔いしれていたのだ。

代金はどうするのかと思うだろうが、彼は行動が早い。先生という職業に着きたかったが、長年の勉強不足（といっても、頭の良さは健在だが。）と、自身の妖怪化に伴い、それを切り捨て、取り敢えずコンビニエンスストアでアルバイトをすることにした。

彼は、ダンスダンスレボリューションなる音ゲーをしている。まあ、知る人ぞ知る音ゲーであるのだが。

今のコインで本日五回目になる。

なかなかこのゲームセンターはダンスダンスレボリューションの人氣は高く、人が何人か並ぶのだが、並んでるときはビールを飲んでいる。何故か酒臭くならないのは不思議である。

さて、四曲目も終了し、時計を見た。

「やべ。バイトの時間ちけえ。」

ダッシュでゲームセンターを抜ける。この時間帯は、人が多いのだが、かなりの速度で走ってるにも関わらず、誰一人として接触はしていない。

「あー、やべえやべえ。」

余裕の表情で、その言葉はおかしいと思うが。それはおいといて、ゲームセンターからバイト先までは一キロで、残り時間一分五秒。

「さて、行きますか。」

歩道を駆け抜ける。都会の歩道は、道の幅が広いが、人が多いのだ。スピードを落とさずに、なんなく駆け抜ける。これだけのスピードで走ってるにも関わらず、誰も感心を寄せないのは、彼が認識阻害魔術を展開しているからである。

「はい、到着。」

五秒の余り。といっても、シフトの五分前であるが。

「こんにちは。シフト交替ですよ。」

「あ、ありがとね秋吉君。」

女子のバイト仲間とシフトを交替し、制服に着替える。流石に着ていた真っ赤の大きなフードつきパーカーはおかしい。

因みに、彼は結構お客さんから好かれる。

というのも、彼は童顔で、男だが、女子みたいな…へたな女子より可愛らしい顔立ちをしているからである。日頃はコンプレックスの源であるので、フードを深々と被っているのだが。

「いらっしやいませ。」

コンビニに、女子高生二人。俺を見るなりひそひそ話を始めた。だから嫌なんだ…。女顔でアルトの声で中身は男。おかしいだろう…。

まあ、営業スマイルは崩さんけどな。なんやかんやで、俺も役にたってるわけだし。

さて、彼がレジ打ちを始めて五時間が経過し、もうすぐシフトの時間が終わるくらいの時間のことだった。なんか、いかにも怪しそうな真っ黒いコートに、サングラス、マスクを着けた中年男性が入ってきた。見るからに怪しい。よくみたら、銃をポケットにしまっている。

でも、この手の輩は刺激し過ぎると、かえって危険だ。興奮して銃を乱射しかねないからな。

「おいお前ら、手をあげろ。さもないと撃つぞ…!」

男は行動にでたようだ。

よく見ると、瞳孔が開いて血迷った眼をしている。恐らく薬物中毒者の末期だろう。めんどろだ…。

「おい、その女！！金を持ってこい！！」

はて、女は居ないんだが…。

「お前だよお前！！さつさとしやがれノロマ！！」

……どうやら、俺のようだ。穏便にいく作戦変更。ボコる。

「お、お？やんのか女ア！！銃だぞコラア！！」

「…中年は黙ってるよ。」

「ああ！？マジで撃つぞコラア！！」

カウンターを越えて、男との距離二メートルといったところか。

「秋吉君！！下がちなさい！！」

店長の制止も俺には聞こえない。

男の指が引き金にかかると同時に地面を蹴り、鳩尾に蹴りを入れる。かなり手加減したので一メートルしか飛ばなかった。

「おい、俺が女に見えるかコラ。」

「どけよクソツ！！ヤクが切れてんだよ！！離せ畜生！！」

かなり息が荒い上に、薬物の匂いがする…。

不意に、嫌な予感がして、後ろに飛び退くと同時に、爆音が炸裂。

そして、銃弾が俺が居たところを通りすぎた。

速度は普通の拳銃程度だったが、油断していた。二人組だったか……。片方は、腹を押さえて立ち上がり、拳銃を俺に向けた。もう一人は、客を人質にとっている。

渋々と手をあげて下がった。

やろうと思えば、人質の解放と、二人相手の立ち回りくらいは楽勝なのだが、如何せん現代社会では不可能と思われる行動をとることになるから、俺が色んな意味で怪しまれる。

「へへへ…これでデメエも手を出せないな。」

「……邪魔。」

いきなり人質を持った方の男が吹き飛ばされた。

「加減間違えた。」

「おい、注目集めてどうする。」

……嫌な予感がするのは俺だけだろうか。どうも、聞いたことある声が二つ聞こえた気がしたのは…。

「あー、すみません。肉まんを三……。夜哉！？えっ…えっ!？」

「あ、夜哉だ。二日ぶりー。」

……間違いないな。

いや、幻聴の可能性がある。無視しよう。

「肉まん三個でお会計は750円になります。」

「無視すんな阿呆。」

「……幻聴。」

「咲魔、殴っていいか？」

「ふえ！？えつと…あー。ゴホン。良いわよ。」

良いのかよ…。

今で確信したので紹介するが、肉まんを頼んだ方は宇津宮咲魔。片方は、宇津宮シキ…と名乗ってたな。今もそれで通してるだろう。確信は無いが。

ふと、視点を移動すると、男二人は気絶しているようだ。

「店長、すみません。あの男二人に救急車と警察お願いします。」

「え、ああ、うん。わかったよ。」

おお、なんか店長パシってるみたいだ。

「秋吉君はもうあがっていいよ。疲れただろうしね。」

「あ、ありがとうございます。」

時給もしっかりといただいて、カウンターを出た。

あ、店長？え？廃棄の弁当くれるの？ありがとう。

「で、なんでお前らが居るんだ？」

本日一番の不思議である。

「きつ…気まぐれよ気まぐれ！ねえ、シキー！」

「えっ？あ、うんうん。そうそう。気まぐれ。」

なんだ、気まぐれか。わざわざ結界を越えてご苦労なこつた。……
ん？そういえば、違和感があると思ったら…。

「二人とも背伸びたか？」

「まつ…まあ、ね。ちょっとね。」

「変…か？」

変というより、大人びたなと俺は思う。咲魔も髪を下ろしてるし。

「いや、悪くないぜ。」

二人がホッとしたのは言うまでもないのだが。

「お前ら、家はどこなんだ？」

「すぐ近くのアパート。」

すぐ近くのアパートって…俺んちもすぐ近くのアパートだし…アパ

「ト一つしかないし…。
まかさな…。」

さて、なんやかんやですぐ近くのアパートに着いた。当然二人も着いてきた。

階段を上がる。着いてくる曲がる。着いてくる。扉を開ける。隣の扉を開ける。

「……お隣さん？」

「マジかよ…まあ、夜哉ん家に遊び行きやすいからいいけどな。」

逃げ出したい気分ドアを閉める。

取り敢えず寛ごうと、ベッドにダイブ。

ガチャ…ガチャガチャ……カチャン。

ん？今、扉が開いた音が…。

「やつほー！！」

「ほぐおっ！！」

背中に鈍痛が走り、変な声を上げてしまった。

この声も聞いたことあるぞ…。いや、鮮明に覚えている。

「そ…穹。おま…。」

「あれ？夜君どこか痛いのか？お姉さんが看病してあげようか？」

「なにがお姉さんじゃ！！俺が年上だ！」

「もう、夜君の意地っ張り。」

水無穹。元は人間だが、二十歳で妖怪になる。元と言えば、俺が気まぐれで助けた村娘的な奴なんだが…。どうしてこう、なつくかね…。因みに大人になって、胸ばかりデカくなりやがったし、シヨートヘアにしてから若干大人びた。なので、何故か年上の俺を可愛がる。因みに俺が妖怪になったのはギリギリ十九だ。

「うふふ。夜君かわいいー。」

なんなんだこいつは…。俺が痛さでもがいてる上から覆い被さるようになかつこうである。端から見たら俺が押し倒されてる風だ。しかもこいつ、風呂上がりなのか、熱いくらいである。
ん？こいつ…まさか…。

「下着じゃねえか！！」

「あは、今さら気づいたってもう遅い。」

そう、下着なのだ。まさかのブラとパンツのみ。しかも裸足。

「かーえーれー！！」

「いーやーだー！！」

なにが嫌だか…。俺的には…その…素肌を当てられるところ…理性
つてもんが危険に晒されるんだが…。

「「穹あああつー!!」」

俺の家のドアが盛大に吹っ飛ぶ午後七時。ドアの修理どうすっかな…。

「あー、咲魔とシキだー。」

「あーじゃないわよ!!は…早く退きなさい!そして、服を着なさい!!」

「着てるじゃん!!」

「パンツは服じゃねえ。常識的に。」

うむ、巨乳が頭に押し付けられかつ素肌が引っ付く俺にしてはなかなか冷静なコメントだな。

「パンツじゃないから恥ずかしいもん!!」

「パンツだろJK。」

シキ、いい突っ込みだ。

「と…とにかく穹は夜哉から退きなさい…。」

「えー、やだー。夜君のお嫁さんは私なのー。」

「俺は痴女と結婚する趣味はねえよ…。」

やっこのことで穹のホールドから抜け出せた。

はあ、前途多難だな…。

ブログなんて無かった（後書き）

わけのわからない日常となりましたが…まあ、後々展開していきま
す。

不定期更新は気にしないでくださいーいー！
これからも宜しくお願いしますー！！

職業：魔装探偵！？（前書き）

はい、文章すくなくいいWWW

職業：魔装探偵！？

夜哉 side

午後七時。女子（約一名）の痛め付けとも思える過度のスキンシップのお陰で肉体的にも精神的にも過大なダメージを負った俺は、取り敢えず英気を養う為にゲームセンターに向かうことにした。家の近くにゲームセンターがあるので、結構快適である。まあ、距離はどうにでもなるがな。

そういえばと、宝くじが当たっていたのを思い出して、五百万円を無駄無く稼いでいた。噂では、数学者は、宝くじの当たる確率は、分母が余りに大きすぎるので、当たる確率が二倍になったとか聞いたも当たる確率が天文学的数字なので買わないらしい。ちょっとした豆知識。

ここで、毎度毎度宝くじを買っている俗に言う、宝くじユーザーの皆様には心からお詫び申し上げたいのだが、実はちょっとした解析をして居たのだ。どこの宝くじで、何番目に引きにいくと当たるかを解析した結果だ。

まあ、チートだな。

つつ訳で、やたら所持金が多い。

なんだかんだ歩いて十分程度でゲームセンターに到着。閉店は十一時だから長居はできないな…。

ふと、眼をやるとこの時間には珍しく、人が多かった。なんでも、格闘ゲームに人だかりができてる。

それも、片側のみ。

片側はよく見えないが、人が座っている。

画面を注視する。今座席に座ったインドア系の男が乱入した。

そこからは、ある意味リンチだった。

コンボが途切れないのだ。俺は結構このゲームをやるのだが、こんなにコンボを続けるのは至難の業だ。仕様として、コンボが十を越えた辺りからボタンを押すタイミングが若干小さくなるし、上級者でも動きがカクカクになる程操作が難しい。画面のキャラクターは、着地の隙を攻撃でカバーしたり、攻撃の隙を回避でカバーしたりと、動きに無駄がなくなめらかである。

ハッキリ言おう。やりこみ過ぎだろ。

こんな動き出来るのは正直俺だけだと思っていた。

ちようどダチヨウ倶楽部のように変な譲り合いが始まったので、俺がプレイするのは容易であった。

「おもしろい。連勝記録を破ってやろうじゃないか。」

キャラクターを選択する。いつもどおり、ナイフ使いの男。対して、相手は巨大な大剣を持った女。

まもなくバトルが始まった。

開始と同時にダッシュで接近される。

俺は動かずに接近を待つ。

予想道理、緊急回避で後ろに回った相手は、大剣を薙ぎ払った。絶妙なタイミングでしゃがみ、そのまま上に攻撃を入れる。しかし、そこには既に居なく、技の出の早い蹴りを出してきた。システムの回避は不可能なので、素直に受け、回数制限のある、ボムと言う範囲攻撃で技の出を潰すと、よろめいてる間にナイフの連続攻撃を入れる。二十コンボ繋がると、絶妙なタイミングで抜け出される。

そこからは、まるで巨剣を携える重量級とは思えないようなめらかな動きで俺を翻弄する。

俺は最大の反射神経を集中させて腕を動かすが、あることが起きた。

「なっ！？処理落ちいいい！？」

俺のキャラがバグって動けない間になんと連続四十コンボを鮮やかに決め、決着がついた。

周囲がどよめいた。そりやそうだな。人間にゲームを処理落ちさせる程の速度はだせねえしな。

「ふいー。やつば夜哉は強いね。」

なぬ…。聞いたことある声…てか、あいつだろ。

「なんで居るんだよシキ。」

「いやー、ゲーセンは好きだからねえ。まあいいや。一緒に回ろうよ！ー！」

「ちよっ！！何故手を引く何故！？」

「いーじゃんいーじゃん！！あ…嫌…かな。」

「いつ…いや、別に嫌じゃないが…。」

俺には嫌だと言うことは不可能だ。考えてみる、背の小さい女の子が上目遣いで俺を見てるんだぞ…あれ狙ってんのかな…。関係ないか。

「なあ夜哉、太鼓やろっ！！」

「おう。いいぜ。」

そういえば、先程から視線が…。嫉妬と羨望の眼差しを感じる。チラリと振り返ると、男どもが鼻の下を伸ばして食い入るように見ていた。

嫉妬つつつても、俺たちは友達同士な訳で、決してカップルではないぞ。

男どもは、太鼓を叩く度に揺れるシキの胸を見ているのだ。それを見ている女子からの卑下するような視線が注がれているのだが。

さて、太鼓も終わって、UFOキャッチャーでもしようかと言うところで、ヤンキーみたいな男（所謂DQNというやつだ）が近づいて、話しかけてきた。

「ねえねえ君たちさ、俺と遊んで行かねえ？」

さて、シキがナンパされました…ん？君たち？俺も入ってんの？まさか…な。

「あ…あはは。お兄さんそれ爆弾投下。」

「え？お嬢ちゃん達遊ばない？」

「お兄さん命は大事にね…。」

「へ？」

怒りは頂点に達した。今こそ狩る頃合いか。

「……俺は男だ。」

赤の目…妖怪の目になる。普段は苦労した末、黒の目になれるようになった。

赤の光る目を直視した男は恐怖で足がガタガタと震え始める。

「は……はひっ!!」

目を黒に変化させる。

「まあ、ナンパする相手は選べよ。」

「す……すみませんでした!!」

すたこらさつさと逃げるように去っていった。

まあ、あの程度ならそこまでキレないわな。今のは脅し程度だし。

というか、俺が仮に女子だとしても、女子二人同時にナンパとは、
どんだけ欲求不満なんだろう…。考えちゃ駄目か。

UFOキャッチャーは苦手なんだ…取り方がわからない。いい感じ
にはまってもアームがゆるゆるだからすぐ取り落とすんだよ。

結局俺は下手すぎて何も取れなかったが、シキは大きなぬいぐるみ
を取っていた…五百円で。

んで、もちろん俺が荷物持ちな訳である。

景品が大きすぎたので、このままゲームをし続けるのもアレなので、

帰ることにした。

とくにどうという事もなく帰宅。

ガチャリ

「お帰りなさい！！私にします？私にします？それともわ・た・し？」

ボタン

ガチャリ

「お帰りなさい私に（ry」

ボタン

俺は見てはいけないものを見てしまったようだ。

「いやん、夜君のいけずー！」

ツッコミ所は満載である。

まずは、……。

「選択肢が無い。」

「一個だけあるよ？」

一個だけなんざ選択肢に入らん。

「遊んでないで入ってきて夜哉。」

咲魔すら勝手に家に上がる始末である。鍵は掛けたはずなんだがな。仕方なく穹のハグを回避して入っていくと、後ろからシキが、先ほど取った巨大なぬいぐるみを抱えてきた。

「で、状況説明するんだけど…。」

おお、なんて優しい。今まさに俺が聞きたいことが状況説明なんだ。でも、その前に。

「穹、下着は止めようぜ？」

「着てるよ。」

薄手のカッターシャツだけな。それじゃあブラは隠しきれてないというか、見せる気満々だろう。透けて見えるし。てか、ズボン穿いてないのが一番の問題だろう。

「うー穿けばいいんでしょー。夜君のバーカ。」

そして、穿いたのはズボンではなくどこからともなく出したミニスカート。残念ながら隠そうとしていないのでパンチラどころかパンモロである。

ゴホンと一つ咳払いをして咲魔が切り出した。

「えっと、只単に、大神から飛ばされたのが現代だったから、ここに居る訳だけど。大神の命じによって。仕事をするようになったの。」

」

「仕事？俺はバイトやってんだけど。」

「魔装探偵。夜君には悪いけどバイト止めてもらわないと。いけな
いよね。」

「そう。悪いけど、大神には逆らえないから。シャルと朝儀は今仕
事のはず。」

「で、仕事内容は？」

「普通の探偵と変わりなかったりするけど、怪奇現象を止めたり、
妖怪の討伐とかも入るわね。」

う…確かに大変そうだな…。バイト辞めないとどうしようもないぞ
…。店長に謝らないと…。

あーあー。俺の平凡はどこへやら…。

「またこの剣で戦えと？」

「無理強いはしない…でも、手伝ってほしい。」

「仕方ないな…店長に謝っとくか…。」

三人の顔がパツと明るくなる。俺が居るだけでみんな明るくなれる
んなら、俺だって一肌脱ごうじゃないか。まあ、無理なもんは無理
だけだな。

「で、朝儀とシャルはどんな仕事なんだ？」

「あー、なんでも、とある鏡がいきなりなにもしてないのに勢いよく割れたらしい。不自然過ぎて怖いから依頼されたわけよ。まあ、大体そんなもんよ。」

鏡が勝手に割れる……。別に身に覚えがあるわけではないが、なんだろうこの悪寒は。

職業：魔装探偵！？（後書き）

鏡が勝手に割れる…まあ、ネタですよね。
ん？何のネタかって？…。

次回からは、オンドウル侍さんのコラボで、オリジナルキャラ、アレンが登場します！！

キャラクター紹介（前書き）

はい、キャラクター紹介です。 は最大で五つ、最低で一つです。
不備な点があれば言うてください。 シキがお応えいたします。

キャラクター紹介

名前：秋吉夜哉あきよしよるや

性別：男

能力：反射と向きを操る能力

武器：赤桜・式式【片手剣】せきおう・にしき

特技：反射神経、数学全般

趣味：ゲームセンターに籠ること、フラリと出歩くこと

好き：空気が旨い場所

嫌い：女顔のことにふれるやつ

危険度：

友好度：

概要：本作の主人公。誰に対しても友好的で、社交性に優れるが、色恋沙汰に関してはかなり鈍感。だがモテる。何故かモテる。

容姿は、人間から妖怪になったため19歳から変わっておらず、さらに女顔である。パツと見は女子にしか見えない容貌は、本人はかなりのコンプレックスのようで、いつも紅いパーカーの大きなフードを深々と被っている。

だが、黒のやや長めの艶やかな髪は時として凛々しさを醸し出す。

普段は、赤い目を、魔術で黒に見せている。

人間の時は、数学の教師を志していたが、妖怪化に伴い、夢を諦めるが、実際本人はどうとも思っていないようだ。

能力については、主に向きを操る力を使い、反射の能力は、『全反射の籠手』という武器を呼び出し、装着すると使えるようになる。

触れると、あらゆる攻撃や、魔法や、呪術。その他さまざまなものを反射させる武具である。

対策法としては、まあ人間に対してかなり友好的なので対策はとる必要はないが、怒らせたら大変である。怒らせる方法：書くのもどつかと思うが、仲間意識が強く、仲間を馬鹿にされるのを嫌うため、まあお分かりだろう。怒らせたら殺されるだろうな、精神的に。その時は危険度が高くなるので注意。

名前：宇都宮咲魔^{うつのみやさくま}

性別：女

能力：無限の創造世界 固有結界

武器：刈り取る死痛の二つ鎌【双鎌】^{かりとるしつうのふたつがま}

特技：武術全般

趣味：戦闘、料理、運動

好き：夜哉

嫌い：夜哉にあだなす全ての存在、大神

危険度：

友好度：

概要：転生してもうた！！シリーズの主人公。夜哉とは違ってかわって社交性が高くない。語尾が「わ。」とか「ね。」になっている。元は、ロリータサイズの少女の姿だったが、大神を脅かす大神にお願いしたら運良く20歳くらいの身長にもらったので髪をポニーテールをとっている。

革新者という位置付けで、進化した人類である。能力を使うときや、怒ったときは黒の瞳が光輝く黄金に変わる。そして、身体能力が上昇する。

危険度が高いのは、若干戦闘好きで、武器はどこかしら持ち歩いている。（持ち歩いていなくても創造できる。）なので、喧嘩を吹っ掛けたら、人間だと半殺し、妖怪だと9割殺し、死徒だと殲滅する。くれぐれも怒らせてはいけない。地球そのものがどうなるかしれない。幸いそこまで沸点は低くないというか結構高い。

髪は黒で、赤の小さなリボンを左右に二つ着けている。目は黒。

因みに胸はそこそこデカい。

能力、《無限の創造世界》は、固有結界というそれだけに特化した魔術回路であって、世界を塗り潰すことができる。

無限の創造世界と言うものは、簡単に言うと自作爆弾の無限倉庫である。

物理的なものが空想が現実になる能力で、敵を殲滅するために剣をばらまいたり、小腹を満たすためにお菓子を出したりと使用用途はさまざまである。

また、能力を使わずとも、大抵の魔術が使える。

対策法としては、まず怒らせてはいけない。絶対にだ。もしキレさせることがあるものなら、自分の周りに大量の剣が現れ、ジ・エンドである。

名前：シャルロッテ・フラァ

性別：女

能力：なし 魔術は使える。

武器：銃器全般

特技：超遠距離狙撃

趣味：夜哉の背中を遠距離からスナイパーのスコープで眺めること。

好き：夜哉、銃器

嫌い：弾詰まり

危険度：

友好度：

概要：言わずともがな二人目のヒロイン。夜哉に惚れている。真面目な性格だが、生真面目という訳でもなく、社交性に優れ、誰に対しても敬語であるが、仲間内では名前は呼び捨てにしている。

外見年齢は17歳くらい。髪は金色のウェーブがかった長髪に、栗色の瞳を持つ。

因みに胸は小さくはない。

随分前から咲魔と行動を共にしていて、盛大にボケるチームの良心としても活躍。

能力はないが、魔術が使える。しかし、卓越した狙撃センスで、遠距離からの精密狙撃は、幾度も活躍している。さらに、属性魔術で弾丸に属性を付加することも可能である。

体力的には、高いものの他のパーティメンバーには見劣りする。

対策法は、取り敢えず敵に回したら厄介である。視認不能の距離からの精密射撃は狙われる方にとってはかなりの神経を磨り減らして回避に徹してもギリギリ急所から逸れる程度であるから、敵に回すのは危険である。しかし、友好的で基本的に喧嘩はしないので安心である。

名前：水無穹 みずなしそら

性別：女

能力：幻惑能力

武器：素手

特技：家事全般

趣味：ショッピング

好き：夜哉

嫌い：勉強

危険度：

友好度：

概要：三人目のヒロイン。夜哉に対してド変態。どうしてこうなった…。

まあ、本人としてはスキンシップなだけなんだろうが。過度すぎる。その強さイコール夜哉の好きさ度と考えれば納得はいくだろう。気づかない夜哉も夜哉である。

容姿は、空色のショートヘアに、随一のスタイルと、少女女の子だと嫉妬してしまう体型である。胸は適度にデカイ。

さらに、20歳から妖怪かしたため永遠の20歳である。羨ましい。因みに、妖怪化に伴い黒の長髪から空色のショートに変化したのである。眼の色は緋色。

夜哉に対してお姉さんの態度をとっている。確かに外見的に丁度良いが…。因みに、夜哉のことを「夜君」と呼ぶ。

能力に関しては、幻惑能力である。幻覚を魅せたり、幻を出したりと、使い勝手が難しいが強力な能力である。最近は夜哉にばかり使っている。効果は媚薬と同じ。しかし、使う度に跳ね返されている。迷惑なだけである。

結局、能力は戦闘に余り用いない。体術での攻撃を主にするが、威力は高いのは仲間内で体術ができる（シャル以外）に教えてもらい、天才的で驚異的なスピードで習得していき、体術は随一の強さになるまでに成長。

対策法としては、近寄らないのが賢明だろう。ある程度の剣の達人が真剣を持つて勝負を挑んだとしても惑わされて終わりが体術で完膚なきまでに打ちのめされるだけだ。

刺激さえしなければ安全なので、普通にそつとしておこう。余程不機嫌でなければ襲ってこないはずだ。襲ってきても、お団子奢ってあげると言えば大抵機嫌をなおす。

名前：秋吉朝儀 あきよしあさぎ

性別：女

能力：体感重力を操る能力

武器：紅球【武器ユニット】

特技：料理、運動

趣味：散歩、ジョギング

好き：夜哉

嫌い：取り敢えずヌルヌルしたもの全般

危険度：

友好度：

概要：四人目のヒロイン。夜哉の妹ではなく、夜哉そのものの裏の存在。戦闘時には残虐性を発揮し、咲魔とタメを張れるだろう。容姿は、紅色の髪で髪型はおさげにしている。目は赤色。胸は…触れてはいけない。

平常時は、先程記した通り友好的であるが、戦闘時に危険度になる。ので注意が必要である。能力について、体感重力というのは、自分にかかる重力のことで、地球から受ける重力を無理矢理引き剥がして、方向を自由自在に変えることができる。

例えば、真横に壁があったとする。それに向かって重力の向きを動かせば、壁に立つことができる。と言うものだ。

武器ユニットの紅球というものは、元は半径10?程度の真紅の球

であるが、念じて魔力を通すと、形状を変化させることができるという万能武器である。もちろん球のまま投擲にも使えるし、遠隔操作も可能である。

対策法としては、まずは友好的な態度をとろう。刺激したら速攻戦闘モードに入るからである。敵に回すのは危険である。肉片さえ残してもらえないかもしれない。まあ、弱いもの苛めはしないだろうが…。

ここで万年筆を止めた。仲間についての書物を書こうとしただけだからな。自分のプロフィールなんて書くのもどうかと思うしな。でも、なんか寂しいよな。やっぱり、自画自賛も甚だしいが、自分のプロフィールを書くことにする。若干恥ずかしいが仕方がない。これは私の宝物にする予定だからな。

名前：宇都宮シキ（うつのみやしき）

性別：女

能力：獣化
ナノブラスト

武器：近接武器ならなんでも。

特技：武術全般

趣味：ゲーム関係

好き：夜哉

嫌い：大神

危険度：

友好度：

概要：この書物を書いている当人。最後のヒロイン。

社交的でどんな人にも友好的な態度をとるが、内に秘めた獣の闘争心は拭いされない。ビーストという種族で、特殊能力としてナノブラストが行うことができる。容姿は、黒の長髪で白の大きな帽子を被っている。耳は所謂獣耳で垂れている。そして、瞳は真紅だ。

外見年齢は18歳。胸は穹に次ぐ。

武器は全て使用可能で、特に二刀流、槍、二爪をよく使用する。

レベル的にはかなりの使い手でも軽くあしらうことができる程度。

腕力には自信あり。

夜哉に惚れていて、一緒にゲームはするが、思いは伝えきれなくて悪戦苦闘中。というか早く気づけバカ。

対策法としては、取り敢えず友好的なのでじゃんじゃん友達になってもいっこうに構わない。

よくゲームセンターで格闘ゲームをするので、乱入してみよう。数秒で倒されます 自分で書いて恥ずかしくなった

「ふうー、なかなか疲れるなこれ。」

自分のプロフィールはやたら短くなった気がするが気にしてはいけない。恥ずかしいのだ。

万年筆はもう片付けて、この書物のタイトルを毛筆で書くことにした。

水を注ぎ、墨をする夜の1時。

「よし、書くか。」

心頭を滅却して一文字目に気合いをいれる。

静かな筆の音が響く。

ただ、さらさらとさらさらと流れるようなリズムに乗って。
そして出来た文字は。

【夢幻史記】

キャラクター紹介（後書き）

さて、プロフィールも終わり、本編に入ります。
前に言ったコラボは次の一話からです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1904z/>

I N S A N I T Y

2011年12月16日20時52分発行